

義務教育学校移行に向けて(その4)

◆小中一貫校から義務教育学校へ引き継ぐ「校旗」

今年度の修了式は、3月24日(金)です。その時に市内小中一貫校3校で校旗の返納が行われます。学校長から教育委員会へ校旗が返納され、小中一貫校としての幕を閉じます。返納された校旗は、各学校のメモリアルケースに保管されます。

新年度4月6日(休)の始業式で新しい義務教育学校校旗を教育委員会から授与します。義務教育学校のスタートとなります。

◆義務教育学校のQ&A

Q 義務教育学校になることで、来年度の入学式は、第1回となるのですか。

A 来年度の入学式の回数は、義務教育学校第1回入学式となります。

Q 多久市では、平成25年度から小中一貫校としてスタートしましたが、義務教育学校に移行することで「校種」が替わります。入学は1年、卒業は9年の新たなシステムに替わります。

Q 義務教育学校になることで、教育方針はどのようになるのですか？

A 「学校に行くなら多久・教育するなら多久」を合い言葉に、知・徳・体のバランスに満ちた教育を展開していく方針は、義務教育学校になっても変わりはありません。現在、次年度に向けた9年間の系統性・連続性を意識したカリキュラムの指針、21世紀型スキル

■問い合わせ 教育委員会 学校教育課

☎75-12227

Q コミュニティ・スクールの取り組みと義務教育学校の取り組みでどのようなメリットがありますか？

A 小中一貫校で異学年の交流が活発になり、子どもが落ち着いてきました。また、コミュニティ・スクールの展開により、地域のみならずボランティアとして学校の学習支援などで活動いただいています。地域のみならず、学習面も効果が出て、子どもたちの豊かな成長につながります。

温故創新

市長コラム Message for Citizen



陶芸家マイケルさんの志

市長 横尾 俊彦

受験時代によく読んだ英単語本『試験によく出る英単語』は当時ベストセラーだった。そのなかに単語「design」の解説があった。「サイン」は「しるし」で、それを「頭から出して、外に出して見えるようにすること」と記憶する。まさに思いや願いを見える形にすることがデザイン。「そうかサインだ」と思ったものだ。大切なものは内なるものだとなぜか教えられた。

さて、今月号市報で紹介されているのは、米国から多久にやってきて五反林窯を主宰する唐津焼陶芸家マイケルさん。

出逢いは「花みずき茶会」の野点茶席だった。主宰者の今は亡き小倉宗厚先生が紹介して下さいました。マイケルさんは主人席で略盆手前のお点前をされていた。淡々と帛紗さばきをされる姿に私は見入った。お点前が終わりに「ハロー」と話を始めると「ボクモ、タクデスヨ」と笑顔が返ってきた。まさに御縁。

マイケルさんには夢がある。「海外の陶芸愛好家に、多久に来てもらい、日本の器づくりを紹介したい」。海外では奇抜なオブリエのような作風が評価されたりするが、それは日常使いを重んじる日本のものではないとマイケルさんは語る。普通の暮らしに根差し、暮らしのシーンで普段使いされる器でありながら、機能的でなんとも美しい、それこそが日本の陶芸の美という持論があるのだ。だから、日本の暮らしや田舎の風景を見せ、茶道や華道も教え、それらと器が結びつく日本文化を伝え、本当の理解を広めるワークショップを開きたいと熱く語られた。

すばらしい卓見と感じた。深く細やかに慮る洞察と、正しく広い啓発があつてこそ真に日本文化が伝わる。そんな企画を工夫すれば、多久ならではの旅企画も可能だ。シェアリングエコノミーで体験型旅をサポートするTABICCAと協定締結した。これから「多久で日本発見」旅プランが始まるかも。受験生も大いに頑張ってほしい、「桜咲く」めざして。

